



Title	プラトン『饗宴』導入部における語りの構成
Author(s)	里中, 俊介
Citation	フィロカリア. 2018, 35, p. 13-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76043
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

プラトン『饗宴』導入部における語りの構成

里 中 俊 介

序

- 一、導入部の構成
- 二、アポロドロスとグラウコン
- 三、哲学への導き
- 四、アポロドロスとアリストデモス
- 五、語り継がれるソクラテス
- 六、『饗宴』における語り
結びにかえて

『饗宴』はプラトンの著作の中でも際立った特徴を有した作品である。『饗宴』の主要な部分は悲劇作家アガトンの家で行われた祝宴を舞台に、参加者たちがそれぞれ順番にエロースに対する贊美の演説を行うという内容である。また、その後に会場へと乱入してきたアルキビアデスによるソクラテス贊美演説も加わる。これら主要演説部分の構成自体もさることながら、注目すべきは、それに先立

序

つて導入部分が存在し、その内容が比較的複雑な点は他の対話編に見られない『饗宴』の特徴である。⁽¹⁾複雑な点というのは、『饗宴』はアポロドロスという人物がアリストデモスという人物から聞いた話を語るという間接的報告という体裁をとつており、またその伝達経路が一樣でないことである。この複雑さは「ある意味で、Logosによって整理しきれるはずない、現実の在り方そのものの複雑さを反映している」⁽²⁾と言えるかもしれない。しかし、アリストデモスは当時の祝宴への参加者であり、目撃者である。なぜその本人が語るのではなく、糺余曲折の後にアポロドロスに報告者としての役割が与えられているのか。本発表はこの導入部分の複雑な構成はプラトンが意図したものであると考え、これを分析し、その意図は何かを探るものである。

一、導入部の構成

導入部の考察に入る前に、まず『饗宴』の作品全体、および本稿

で問題とする部分の構成を簡単に紹介しておきたい。『饗宴』の舞台は悲劇作家アガトンの自邸で開かれた祝宴である。レナイア祭で悲劇作品が優勝したことを祝つた宴の二日目が舞台とされており、

ソクラテスをはじめとして多くの実在の人物も登場している。この作品の主な内容は祝宴の参加者たちによるエロースへの賛美演説であり、また、のちに乱入したアルキビアデスによるソクラテスを賛美する内容の語りである。エロース賛美はパイドロス、パウサニアス、エリュクシマコス、アリストファネス、アガトン、そしてソクラテイスによって行われる。ただし、ソクラテスは若いころにディオラテスによって受けたエロースに関する教えを披露する。

以上のような内容の主要部分に先立つて、『饗宴』は導入に当たる部分を有しており、すでに述べたようにその内容が複雑な点に特徴がある。そこでは、これから語られる主要部でのエロースとソクラテスへの賛美演説が、誰によつて聞き取られ、伝えられたのかが明らかにされている。つまり、アガトン邸での祝宴について、直接その場面の描写が始まるのではなく、間接的報告であることがあらかじめ読み手に提示されるのである。そして、その間接報告の伝達経路の問題を含め、『饗宴』の主要部を成す演説が語られる経緯が、アポロドロスとその友人たちとの会話の中で明らかになる趣向なのである。そこにグラウコンとのエピソードなどが織り交ぜられることによって描写の複雑さが増していく、読み手にとつてはその関係性を一度では把握しにくい内容となつてゐる。そこで、以下では問

題の導入部をその流れに沿つて概観する。

一・アポロドロスとグラウコン

導入部分の複雑な構成はアポロドロスとグラウコンの会話部分に集中しているため前後の文脈について「言及される」とは比較的少ない。そこで、以下では『饗宴』の場面の展開上アポロドロスとグラウコンの会話が挿入される」との意味を確認していきたい。

『饗宴』は、やや唐突にアポロドロスによる友人たちへの次のような言葉で始まる。

引用 1

「君たちがたずねてることについて、ぼくには練習ができるといないとは思えないね。」

(*Symp.*, 172a1-2.)

この直後にアポロドロスがグラウコンと数日前に出会つた場面へと話が移り替わるのであるが、そのようなエピソードが挿入される目的は、端的には「練習ができるといないとは思えない」という言葉の説明である。グラウコンとの会話が終了した直後にアポロドロスが同様の表現で「だから、はじめに言つたように、ぼくはおたずねの」とについて練習ができるといないわけではないのだ。」と繰り返していることからも、それは明らかである。では、アポロドロスがこ

のエピソードを披露した意図が、「練習ができるないとは思えない」すなわち「練習ができる」という理由の説明だとすれば、エピソードの複雑な内容がどのように理解されるべきかを確認していく。その際に、グラウコンの問い合わせに注目することにする。

グラウコンの第一の問い合わせは以下のようなものである。

引用2

「教えてくれないか、君自身がその会合には出ていたのか、それとも出ていなかつたのか。」

(*Symp.*, 172b7.)

グラウコンの最初の問い合わせは、話題となつてている会合にアポロドロスが直接立ち会つた目撃者かどうかを問うていて、「この問い合わせに先立つてグラウコンは自分の現状持つている情報を明らかにしているが、そこでは次のように言われている。

引用3

「アガトンのところでの会合のことを詳しく聞きたいと思つてね。ソクラテスやアルキビアデス、それからその時に宴に同席していた他の人たちも加わつたという。あの会合の様子をね。ほかでもない、彼らの語つたもろもろの恋の話について、それらが一体どのようなものであつたのか、それをすつかり聞いて

みたいのだ。というのは、ある別の人気が、ピリッポスの息子ボイニクスからその内容を聞きおよんでも僕にいろいろと話していくんだが、その人は、君もまたこうしたことを知つていて言つていたからだ。いやそれだけではない、こうして君を呼び止めたのは、その人がそもそもはつきりしたことは何も語る」とができないなかつたからなのだ。」

(*Symp.*, 172a6-b5.)

この発言の前半部分はグラウコンの現状の認識を示している。アガトン邸での祝宴にはソクラテスとアルキビアデスなどが出席しており、そこでは「恋に関する話」が取り交わされたということこれまでがグラウコンが知りうる限りの情報のようである。他方、後半部分では情報源と伝達の経緯が明らかにされている。その情報の伝達経路はボイニクスという人物から名前すら不明の「ある人」を経由してグラウコンに至つたものであるが、その「ある人」は「確かなことを言うことができなかつた」ため、グラウコンはソクラテスの仲間であるアポロドロスを頼つてきたという経緯なのである。

こうした描写からグラウコンに祝宴の情報が届く時点ですでに二人の人間を経由していることが分かる。一般的に口承の伝達過程に介在する人間が増えるほど、元の情報との誤差は大きくなると考えられるので、グラウコンに至つた時点で確かな情報がもたらされなかつたとしても不自然ではない。すでにグラウコンの持つている情

報は、後にアポロドロスが語る物語内容から変質しているか、あるいは部分的、断片的なものであることが示唆されている。

このように、グラウコンの有している情報の不完全さが明らかにされたのち、グラウコンは先の引用2の問い、(172a)をアポロドロスに投げかけている。その意図はアポロドロス自身がその場に居合わせており、直接の目撃証言が可能ではないかと期待してのものであることは明らかである。また、アポロドロスとソクラテスは「仲間である」⁽⁸⁾のだから、たとえアポロドロスが祝宴には出席していない場合でも、グラウコンに情報をもたらした「ある人」よりも、アポロドロスの方が、グラウコンにとって確かな情報源になる。

グラウコンはアポロドロスが直接証言をもたらしてくれるものと期待して問い合わせているが、アポロドロスは、自分が出席していない理由を以下のようにグラウコンに説明している。

引用4

「君は知らないのか、アガトンがこの地を去つてからもう何年にもなるし、一方、ぼくがソクラテスと親しく付き合い始めて、あの人の語ることなどすべてを知ること、これを日々、自分の関心」とするようになつてからまだ三四年にもならないのだよ。ところであの人と付き合い始める前のぼくはといえば、行き当たりばつたりに気の向くままあちらこちら走り回りながら、しかもそれでいて、自分では何かをしていくつもりでいた

のだが実際にはぼくは、だれよりみじめな人間だったのだ、そういう今の君に劣らずね。何しろ君ときたら、哲学するくらいなら何でも他のことをすべきだと思っているのだからね。」

(*Symp.*, 172c3-173a3)

この説明はグラウコンの問い合わせに端的に答えるものではない。アポロドロスはやや回りくどい言い回しをしているが、主張しているのは「アガトンがアテナイを去つて久しいこと」「自分がソクラテスと近しい間柄になつてまだ三年にも満たない」と「ソクラテスと出会う以前の自分は哲学することなど顧みず、みじめな存在であった」ということ」という三点である。先の二点が間接的にグラウコンの問い合わせに対する答えになつていている。つまり、アガトン邸の祝宴はかなり過去の出来事であり、また、自分とソクラテスの関係も三年以前には始まつていなかつたのであるから、自分は話題となつている祝宴には出席していないということなのである。

では、実際祝宴はいつ行われたのか。それがグラウコンのアポロドロスに対する二番目の問い合わせとなる。それに対する両者のやり取りを以下に引用する。

引用5

「それが催されたのは。僕たちがまだ子供のころで、アガトンが彼の最初の悲劇作品で優勝した折の事だ。(後略)」

「とすれば、ずいぶん昔の」)といふね。」

(*Symp.*, 173a5-8.)

このやり取りの中で『饗宴』で語られるアガトンのための祝宴が開かれた時期が判明しているが、注目すべきはグラウコンが「ずいぶん昔のことだと思われるね」と答えている点である。すでに暗に示

されていた導入部における現在とこれから語られる物語の時代との隔たりがグラウコンの言葉によって明確に強調される。問題の祝宴が時代を隔てた過去の出来事であることが判明することで、情報源の重要度はより増し、その当時の記憶をとどめる証言者の存在が問題となる。グラウコンの関心は常により確かな情報をもとにした証言にあるため、続いて、次のような両者のやり取りが展開される。

「え、それでも念のため、ぼくは、彼から聞いた事柄のうちのいくつかの点を、その後ソクラテス本人に問い合わせてみたのだが、ソクラテスは、アリストデモスが話した通りだと、ぼくに同意してくれたのだ。」

(*Symp.*, 173a8-b6.)

いいで、アポロドロスの情報源が明らかになると同時にグラウコンの情報源についてもその伝達経路の全体が明らかになる。どちらのルートも情報の源はアリストデモスという人物であって、彼は当時ソクラテスの熱狂的支持者であった事実が判明する。祝宴当時のソクラテスに関する事柄であれば、アリストデモスはアポロドロス以上に信頼に足る人物ということになろう。しかし、すでにグラウコンによって述べられていたように、グラウコンはアリストデモスから直接話を聞いたわけではない。間に二人の仲介者を挟んだがために、その情報は十分にグラウコンまで届かなかつたのである。その一方で、アポロドロスはアリストデモスから直接当時の目撲証言を聞いている。ここには情報源からの距離という問題において大きな差が存在している。アポロドロスとグラウコンが同一の情報源を持ちながら同一の事柄に対して伝達された情報内容に差が生まれたのは不思議ではない。また、アリストデモスの情報の確かさを保証するのは彼が直接問題の宴の場に出席していることである。じかに現場を目撲した人間による証言はグラウコンが第一の質問の際に期待

引用 6

「しかし、いつたい誰が君にその話をしたのだ。ひょっとして、ソクラテス自身が話してくれたのか」

「『ゼウスに誓つてそれは違うね』と僕は言った。僕に話した人というのは、ほかでもない、ポニニクスに話したのと同じ人物なのだ。アリストデモスとかいう人だつたが、キュダテナイオン区の住人で、身は小柄、いつも裸足でいる男だ。彼がその祝宴に出席していたわけだが、ぼくの見るところ、彼はその当時、最も熱烈にソクラテスを愛する者たちの一人だつた。とは

「しかし、いつたい誰が君にその話をしたのだ。ひょっとして、ソクラテス自身が話してくれたのか」

「『ゼウスに誓つてそれは違うね』と僕は言った。僕に話した人というのは、ほかでもない、ポニニクスに話したのと同じ人物なのだ。アリストデモスとかいう人だつたが、キュダテナイオン区の住人で、身は小柄、いつも裸足でいる男だ。彼がその祝宴に出席していたわけだが、ぼくの見るところ、彼はその当時、最も熱烈にソクラテスを愛する者たちの一人だつた。とは

一方で、アポロドロスはアリストデモスから直接当時の目撲証言を聞いている。ここには情報源からの距離という問題において大きな差が存在している。アポロドロスとグラウコンが同一の情報源を持ちながら同一の事柄に対して伝達された情報内容に差が生まれたのは不思議ではない。また、アリストデモスの情報の確かさを保証するのは彼が直接問題の宴の場に出席していることである。じかに現

していたところもある。また、さらに注目すべきはアポロドロス

がソクラテスにアリストデモスから聞いた話の内容を確認し同意を得ている点である。グラウコンはソクラテスからの直接の証言に対する期待をアポロドロスへの第三の質問（引用6、173a）の際にあらわにしていた。アポロドロスはソクラテスから直接話を聞いたことを否定しているけれども、他者から聞いた内容をソクラテス本人に確かめているのである。ここにおいて、アポロドロスの話はいわば正当な継承過程を経て、開示される時を待つていているということができるだろう。

以上、グラウコンとアポロドロスによる導入部に挿入されたエピソードの言説を展開に沿つて見てきたが、グラウコンからの質問の主旨はアポロドロスの情報源の信頼性を確かめようとする点にあると言つうことができるだろう。⁽¹⁵⁾ その意味ではソクラテスに近しい人物を介した情報であればその信憑性は高まる。まして、ソクラテスの承認を得ているとなればなおさらである。グラウコンがアポロドロスによってそのことが告げられた直後に質問を切り上げ、道すがらその話を語りあおうと提案しているのは象徴的である。このアポロドロスへの質問とそれに対する応答の過程は、アポロドロスがこれから語ろうとする物語内容の信憑性が確認され、最終的にソクラテスによって正当性が付与される過程とみなすことができるだろう。

三・哲学への導き

前章で確認したグラウコンとのエピソードをアポロドロスがまず提示したのは、自分は「練習ができる」ということを示すためであつた。それは端的に街へ向かう道中グラウコンとともに語り合つたということ、すなわち予行演習が済んでいるということを示していよう。しかし、同時にグラウコン側の情報と比較対照された結果、アポロドロスの話は語り継ぎの経緯やソクラテスによる承認という点において信頼に足るものであることが明らかにされていた。そのことに起因する、いわば自信の表れが次のような言葉に表されている。

引用7

「だから初めに行つたように、ぼくはお尋ねのことについて練習ができないわけではないのだ。ところで、もし君たちにも詳しく話す必要があるとすれば、ぜひしなければなるまいね。」

(*Symp.*, 173c1-2)

ここにアポロドロスの語り手としての意識を見て取ることができる。「必要があるとすれば、ぜひしなければなるまいね。」という言葉には、単に要請に応えて話をしようとするだけではなく、より

積極的な語り手としてのアポロドロスの意識が表れていると考えられる。そして、アポロドロスの積極性は「練習ができる」というだけではなく、語ろうとする話の内容にも裏打ちされている。アポロドロスは話を始める前に目の前の友人たちに向けて次のように語りかける。

引用 8

「実際僕という人間は、ほかの折でもそうなんだが、哲学に関する話となると、ぼく自身が話そうとあるいはほかの人から聞こうと、その話から利益が得られるなどといった考えから離れて、ただもう、それだけでとても楽しいんだ。けれども、何か

ができる。

これとは別の話となると、つまり、とりわけ君たちがしているような、裕福で、金儲け仕事をする人たちの話となると、ぼく自身嫌気がさすばかりか仲間の君たちをあわれんでしまうんだ。なにしろ、君たちは何もしていないのに、自分では何かしているつもりになつてているのだからね。」

(*Symp., 173c2dl.*)

れ、哲学とは無縁な人々が想定されている。^[12]

したがつて、『饗宴』の主要部分は、アポロドロスによる哲学の勧めと見なすことができる。「哲学に関する話」という語の使用から、これから友人たちに語られる内容、つまり『饗宴』本編が哲学に関わるものであることが予告されている。グラウコンとの対話の中では、「恋の話」であつたものがソクラテスの承認を得たものであることが明らかにされた今、自覺的にそのように呼ばれていると考えてもよいだろう。ソクラテスによって哲学への目覚めを経験したアポロドロスにとって、ソクラテスから正当なものと認められた話は、積極的に語られるべきものとして意識されているということ

また、アポロドロスはただ使命感あるいは義務感によつてのみ哲學的な話をしようとするわけではない。哲学を通じて他者と交流することの中に歓びを見出していることを明確に述べている。その一方で、利得や金儲けに関する事柄について語ることには嫌悪を示し、世俗的な関心の中にとどまつてゐる友人に對して厳しい言葉を投げかけている。^[14]アポロドロスに言わせれば哲学をすること以外は「何もなしていいない」ことと同じなのである。そのような相手に對してこれから哲学に関する話を語ろうとするアポロドロスは、相手を哲學的営みへと参与させるために「確かなこと」を伝えることが要求される。とりわけソクラテスによつて認められた物語であればなおさらアリストデモスからの語り継ぎをうまく果たさなくてはならな

い。このように、アポロドロスは哲学することが有意義なものであることを、そこに生じる喜びとともに伝える語り手としての役割を担つており、その自覚を備えた存在であることが明確に示されているのである。

このように、『饗宴』冒頭の複雑な内容を持つたエピソードの挿入はアポロドロスによって意図的に語られており、それによつて自身の語ろうとする哲学的言説の正当性を主張し、語り掛ける相手である友人への哲学的営みへの参加を促そうとする目的を有していると理解することができる。

しかし、導入部の記述は確かにアポロドロスによつて語られようとする『饗宴』主要部分の内容が信憑性のある内容であることを印象付けるけれども、こうした印象を与えるにはあまりに錯綜した情報伝達のプロセスが提示されているようにも思われる。^[15] こうしたプロセスが構築され、導入部において示されねばならなかつた理由が別に考えられる必要があるだろう。そこで、次章以降ではアリストデモスからアポロドロスへ、そしてさらに友人たちへと連なる「語り継ぐ」という行為自体に注目して、その理由を考察する。

四．アポロドロスとアリストデモス

さて、アリストデモスからアポロドロスへの語り継ぎのプロセスについて考察する際、両者の違いに着目されることは少ないようと思われる。両者は共にソクラテスによつて哲学の道へと導かれソク

ラテスを信奉するという共通の性格付けが顕著なため、その異なる点には注目されにくい。^[16] しかし、この両者が異なる「世代」を代表しているという点にはより注目されてよいと思われる。

先に取り上げて論じたが、アポロドロスとグラウコンの会話の中

で、アガトンの饗宴がいつだつたのかという質問が投げかけられたのを思い出す必要がある（引用5 113a）。祝宴の開催時期に関するその質問自体は、アポロドロスの言説の信憑性、つまり情報源の信用性に直接かかわるものではないにもかかわらず、グラウコンから発せられた質問であった。その質問によつてアガトンの祝宴がかなり過去の出来事であることが判明したのである。それは、実際には紀元前四一六年に開かれたものであると考えられる^[18]。一方で、アポロドロスたちがいる『饗宴』内部での「現在」は紀元前四〇五年から四〇〇年ごろであろうと推定される。^[19] これはまだソクラテスが存命の時代である。アガトンの祝宴が、アガトンがレナイア祭で処女作によつて栄冠を勝ち取つた時のことだと聞いた際のグラウコンは「ずいぶん昔の事らしいね」^[20] という反応を表していた。また、アポロドロスはその出来事は自分たちが「まだ子供のころの事」^[21] だと述べており、こうした描写からは読み手はたとえ出来事の日時を特定できない場合でも、アポロドロスとグラウコンにとってアガトンの祝宴が時間の離れた出来事だということが分かるように描かれている。つまり、アポロドロスとアリストデモスが違う世代の人間であるということが想定され描かれているとみていいだろう。ここ

では、アリストデモスからアポロドロスへの語り継ぎが世代を超えて行われたものであることが読み手に告げられているのである。しかし、世代を超えるということは何を意味し、どのように機能しているのだろうか、次章では世代ということをソクラテスとの関係性から考察することとする。

五 語り継がれるソクラテス

ソクラテスの生前の言動をいかに正しい仕方で語り継ぐかということは、プラトンにとっておそらく大きな課題の一つであつたことは想像に難くない。間接的報告という形式の『饗宴』をそうした試みの一つとしてとらえることは、十分に可能である。⁽²²⁾『饗宴』の執筆時期を正確に特定することは困難であるが、作品中の歴史的記述からの推定によれば、紀元前三八五年以降ではないかと考えられている。⁽²³⁾これはソクラテスの死後十数年以上が経過した段階であり、人々の記憶からもソクラテスの生前の姿が薄れつゝある頃であったのではないかと考えられる。このような時代的状況において、なに一つとして書き残すことのなかつたソクラテス像をいかに保存し、語り継ぐかということはより大きな課題であつたに違いない。もちろん、こうした状況とは関係なく、ソクラテスの死後、その哲学的嘗みをいかにして継承していくことができるかは、プラトン自身が自らに問っていたところであろうと想像される。

このような観点から『饗宴』において、アリストデモスからアポ

ロドロスへとソクラテスに関わる言説が語り継がれる描写を眺めるとき、そこにはソクラテスを語り継ぐということにおいて生じる特殊な事情が反映されているようと思われる。つまり、ソクラテスの死後において、その言動について知るにはソクラテスとの直接的交流体験を持つ人物から情報を入手するか、あるいはなんらかの記録媒体によるしかない。いずれにしても、ソクラテスという人物を象徴する対話的営みを直接経験することは不可能であり、何らかのものに媒介された経験の中で、ソクラテスとは誰か、その哲学とは何が問われ、伝えられなければならなくなつたのである。

このように、ソクラテスを間接的に経験することが不可避的な状況になりつつあつたということが、アポロドロスとアリストデモスによる語り継ぎという状況設定と対応しているのではないかと考えられる。つまり、ソクラテスを直接経験した人々とそのような経験を持たない人々との境目において一つの世代の違いが生じているのであって、これは単に古い世代と新しい世代ということではない。アリストデモスは『饗宴』の本編においてソクラテスとともに居るけれども、アポロドロスはそのソクラテスとの体験の中には存在していない。常に語り継がれた事柄の語り手として、その外側にいるのである。このようにして『饗宴』という作品はアリストデモスからアポロドロスへと語り継がれたものを今度はアポロドロスが語り手になって「君たち」＝「裕福で、金儲け仕事をする人たち」に向けて語る二重の間接的報告という形式が提示されているのである。

六. 『饗宴』における語り

『饗宴』は、アポロドロスがアリストデモスの話を伝えるという形式になつており、アリストデモスは背景に退き、アポロドロスが主要な語り手となつてている。その意味で『饗宴』においては、二人の語り手は重なり合つてゐる。アポロドロスは基本的に「アリストデモスが語つてくれたように」語ると述べており⁽²⁴⁾、また、アポロドロスによる語りの中に「彼（アリストデモス）は言つた」という文句が隨時挿入されることで、アポロドロスがアリストデモスをなぞりながら語つていることが示されている。しかし、その一方で、二人の語り手の「ずれ」も作品の中に表されている。とりわけ象徴的なのは、エロースを賛美する演説を行つた人物は『饗宴』に登場する人物以外にもいたのであるが、アリストデモスはそのすべてを覚えておらず、またアポロドロスもアリストデモスの述べたことすべてを記憶していないという発言がなされていることである。⁽²⁵⁾『饗宴』で様々な演説を披露するエロース賛美への参加者たちは、アリストデモスとアポロドロスによつて記憶のうちから選択された人物たちなのである。原体験の記憶は語り継ぎの過程で曖昧なものとなつていくのは必然であろうが、その一方で、語り手によつて何を語り継ぐべきかが意識され、あるいは無意識的にも記憶の劣化や変質によつても選択、改変されていく。しかし、その営みが情報の伝達の正確さを競うようなものでない限り、他方で新たな語り手の思考がつ

ながれて行く過程でもある。アポロドロスの語りの中に、アリストデモスの語りが登場してくることが示すのは、そのような過程の上『饗宴』が成り立つてゐるということを読み手に告げてゐるのではないだろうか。

このように考えれば、導入部における語り継ぎのプロセスの提示は『饗宴』の語りの構造を示すと同時に継承と断絶に関する様々な可能性を示している。つまり、ソクラテスとの直接的な交流の場であつたアガトンの祝宴での体験は、アリストデモスからアポロドロスを経て語り継がれ、読み手まで継承される場合があるのと同時に、グラウコンの側のルートのように、「確かなこと」は失われしまうということも十分にあり得ることを表してゐる。また、継承されたアポロドロスの話自体も、「確かなこと」が保全されているという保証は最終的にはソクラテスの承認に拠つてゐる。ソクラテスによる承認は、一方で『饗宴』主要部分の内容を正当化するよう機能しているけれども、他方で、ソクラテスが承認したのは、アリストデモスの話の中からアポロドロスがソクラテスに尋ねた「いくつかの事」と言われており、それが『饗宴』のどこを指すかは判然としない。そのため、『饗宴』の何を語り継ぐべき「確かなこと」として考えるかは、読み手にゆだねられていると言えるだろう。

したがつて、ソクラテスによる承認は、単に『饗宴』の内容の正当性や権威を保証しているのではなく、この作品も語り継がれるという動的過程にあるということを示してゐる。アリストデモスとア

ポロドロスの語りの「重なり」と「われ」は、その語りがそのよう

な運動の中で、多層な声として折り重なつてゐるかのことを暗示してゐると考えられるのである。

結びにかえて

本稿では、『饗宴』における導入部が複雑に構成されている意図を明らかにするために、まず、その複雑さを生じさせる多様な情報を含むアポロドロスとグラウコンの会話を概観した。そして、その挿入エピソードが、後続するアポロドロスによる哲学への導入においてこれから語ろうとする話の正当性を強調する機能を果たしていることを確認した。しかし、それだけが目的であれば細部の複雑さや二重の間接的報告は必ずしも必要ではない。そこで、二重の間接性を作り出してゐるアポロドロスとアリストデモスの語り継ぎのプロセスに注目し、それが生み出す重層的な語りが『饗宴』においては意識的に描き出されていることを示した。何のことが意味するの

は、『饗宴』にはソクラテスの言説がそのまま受け継がれていふところではない。むしろソクラテスを起点としながら、その言行を語り継ぐことによって知を愛するところに好みに参与する者の声が層をなし、折り重なつて作品が形成されてゐるといふことを示しているのではないだろうか。

註

(1)

プラトの他の対話篇の導入部との比較検討については、浜下昌宏「Prefatio ad Platonis Symposium—あるいは導入のロジック／レトリックについて」『神戸女学院大学論集』三六（一）、八一～九一頁、「一九八九年、が詳しい。

(2)

同論文、八九頁。

(3)

『饗宴』の構成とその区分に関する解釈の分かれりのりではあるが、本稿では、172a-174aまで、すなわち『饗宴』の始まりからアポロドロスが友人たちに当時の出来事を語り始めるまでを便宜的に「導入部」として考察する。BuryとRobinによる区分の比較については、浜下（前掲書、八四一八六頁）が詳しく紹介してゐるが、Buryは172a-174aまでを「序」として区分する。一方Robinは172a-178aまでを「序」とし、実際にアガトン邸でエロースに関する贊美演説が始ままでの過程（アリストデモスとソクラテスの出会いからアガトン邸へ転向する）をやりに含めている。

Hunterは「Setting the scene」へつて172a-178aをまとめているが、172a-174aを「Telling the story」へつて別の節を設けて論じてゐる。Buryも同様。（R. Hunter, *Plato's Symposium*, Oxford, 2004.) 他方、Taylorは172a-178aを「Introduction」へつて扱つてゐる。（A. E. Taylor, *Plato The Man and His Work*, London, 1926, p. 211.)

(4)

本稿での訳文は、朴一功訳『プラトン 饗宴／バイブル』西洋古典叢書、京都大学学術出版会、1100七年、に拠る。

(5)

Symp., 173b-9cl.

(6)

祝宴の参加者として、ソクラテスと共にアルキビアデスの名前が挙げられているのは、グラウコンの関心が、両者にまつわる「恋の話」にあるところであり、おそらく、哲學的なものとどうよりも大衆的な好奇に基づいてこの名前を示すと考えられる。

(7) *Symp.*, 172b45.

(8) *Symp.*, 175a-b.

- (9) 自分が「みじめな存在であった」ことを主張し、それに続く「やがて今この君に劣らずね。」と云ふアポロドロスの言葉は、間接的にグラウコンが哲学について関心を持つてゐることを窺わせん。
- (10) 話の信憑性とは言つておき、引用4終盤のアポロドロスの発言にも表れてゐる所によれば、グラウコン自身は哲学者とは無縁であり、その関心はアポロドロスの話の哲学的内容に関するものではないと考えられる。(註のねむだら、参照) 浜下はアポロドロスの態度は「言葉を介してしゃべ構成されて入ればよしとする」人物と解し、「後にディオティマ Diotima=Socratesによって提示される、「俗人βάρανος」と「カイヤノιςανδρός ἀντί」の対比 (202d-203a) を先取りしていふ」と考へる。(浜下、前掲論文、八四頁) Nussbaumはグラウコンの関心は政治情勢に関するものだら推定してゐる。(M. Nussbaum, "The Speech of Alcibiades: A Reading of Plato's *Symposium*", *Philosophy and Literature, volume3, number2*, 1979, pp. 131-172, p135)
- (11) 話の参考。
- (12) Mitchellが、斯くての話を聞くのが好きである。本稿では金懸けでアポロドロスの想定を述べてゐる。(R. L. Mitchell, *The hymn to Eros: a reading of Plato's Symposium*, U. P. America (Maryland), 1993) Halperinも同様である。"To be sure, Apollodorus's interlocutors are not seekers after truth,...they are motivated not by philosophical eros but by vulgar curiosity.", (D. M. Halperin, "Plato and the Erotics of Narrativity", *Oxford Studies in Ancient Philosophy, Supple. vol.2*, 1992, pp. 93-129, p. 107.) Hunter もまた、素性のはうやくことなら聞か手をつかずして関心はあるが、裏剣に哲学者しなる必要のない読者だと考へる。やがて、アリストテレスからアポロドロスを経て、名前のない聞か手くじゅ連なりは、遠回しに、皮肉っぽいクラテスからアラト、セントラルの読者との関係を表現してゐるところの解釈を示してゐる。(Hunter, op. cit. p27.)
- (13) *Symp.* 173c3.
- (14) 石川洋一、参考。
- (15) R. G. Bury, *The Symposium of Plato*, Cambridge, 1973 (1st ed. 1909). xvi.
- (16) W. S. Cobb, *Plato's Erotic Dialogues*, New York, 1993. p. 62.
- (17) ただし、山本は、本稿とは異なる観点から両者の違いを強調している。山本によれば、アリストテレスが「自分の言葉」を語らない、解釈も恣意的選択もしない、記憶しているだけを話す人物であるのに対して、アポロドロスは何が重要かを自ら判断してノクラテスに確認し、「記憶」に相応しいもの (178a) を判断し、取捨選択し、「自分の言葉」や語らなかったり、「饗宴」の語り部として相応しい人物である。(山本義、『アーティン饗宴 説と詳解』、東京大学出版会、1101六年、一七七一八〇頁)
- (18) Athenaeus, *Deipnosophistai* 5. 217a.
- (19) ノクラテスの生存 (ノクラテスの刑死は前三九九年) とアガトーンのアテナイ不在 (前四〇五年までにはアテナイから去ったと考へられる。Buryは遅くとも前四〇八年頃までにではないかと推定してゐる (Bury, *op.cit.* xvii.))に対する言及から、おおむねの期間中と推定される。この問題についてこゝはNussbaumが詳しく述べる。Nussbaumはアルキビアデスの暗殺 (前四〇四年) による出来事おどを考慮に入れ、その直前だらじく解釈を示してゐる。(Nussbaum, *op.cit.* pl36) まだ、Hunterはアルキビアデスの死の前後を推定してゐる (Hunter, *op. cit.* pp. 4-5.)
- (20) 石川洋一、(Symp., 173a)
- (21) 石川洋一、(Symp., 173a)
- (22) 「間接伝聞による報告」の形式は、特にGlaconの知識のあこまざれ多岐に亘り、改めて眞の姿、即ち正しくSocrates像の構築の必要性を意味してゐる。(浜下、前掲書、九〇頁) 本稿では、いの「正しくSocrates像の構築」と云ふ問題に関連して、Socrates像の探求をじゅう當みが「語り継ぐ」と云ふ行為のプロセスのやうにゐることを論じる。

(23) 『饗宴』の執筆時期を推定する有力な手掛かりは182b6行トの「異邦人たちの支配のもとに暮らしている地域」という記述（前三八七年の「大王の和約」によるペルシアによるイオニア諸都市の支配のこと）を示すと考へられる。異論についてはH. B. Mattingly, "The Date of Plato's *Symposium*", *Phronesis*, vol.3, no.1, 1958, pp. 31-39), 193a2以下における「ラケダイモン人によるアルカディア人の分裂」(前二八五年)に関する記述、さらに、ペイドロス演説の中(178e-179b3)の「恋するもの」と「恋されるもの」からなる軍隊への言及（おそらく前三七八年あるいはその直後に結成されたとされるテーバイの「神聖隊」が想定されている）である。これらに基づいてDoverは『饗宴』の執筆時期を前三八四から三七九と推定してゐる。(K. Dover, *Plato Symposium*, Cambridge, 1980, p. 10.)

(24) *Symp.* 174a12.

(25) *Symp.* 178a3-6 「ふりふり、彼らのひとりひとりが語った内容のすべてを、アリストテレスがすっかり覚えていたわけではないし、ぼく（アポロドロス）の方も僕で、彼が語つてくれた事柄を何もかも覚えているわけではない。けれども、彼がもつともよく記憶に留めていた事柄で、しかも印象深いとぼくに思われたもの、そつしたものについて各人が述べているところを、君たちに話すことにしよう。」

また、180c1-4でも次のように言われている。「ペイドロスはおよそ以上のような話を語つたと、アリストテレスは言つたのだが、やならにペイドロスの後には、何人かほかの人たちの話が続いたけれども、彼はその人たちの話したことあまりよく覚えていなかつたらしい。」

(26) *Symp.*, 173b5.

(れいなが・しゅんすけ 文芸学 博士前期課程修了)